

「GO FOR KOGEI 2025」 出展アーティストと詳細発表

海外アーティスト含む 18 組が参加決定

—アートと工芸、くらしが融合する展示を通じて「工芸的なるもの」を発信—

～イギリスでの国際シンポジウムと台湾での展覧会開催も決定～



相良育弥 ワークショップ風景「紡ぎのいずみ vol.2」(池上曽根史跡公園、2024 年) Photo: Lily Camera

認定 NPO 法人趣都金澤は、「GO FOR KOGEI 2025」を 2025 年 9 月 13 日～10 月 19 日の 37 日間で開催いたします。

今年のテーマは、約 100 年前に民藝運動を提唱した柳宗悦の言葉より「工芸的なるもの」。

さまざまな素材を扱う現代アーティストや工芸作家、職人が素材・技法と向き合う態度から生まれるさまざまな実践を通して、それらが作り出す多様な暮らしの姿を提案していきます。

また 7 月 24 日にはヴィクトリア&アルバート博物館 (V&A) と共同で、イギリス・ロンドンでの国際シンポジウムを、10 月 3 日～2026 年 1 月 18 日には台南市美術館から招待を受け、台湾・台南での展覧会も開催決定(詳細 P12)。

アーティスト一覧 (五十音順)

アリ・バユアジ、上出恵悟、桑田卓郎、コレクティブアクション、サエボーグ、坂本森海、相良育弥、清水千秋、清水徳子+清水美帆+オイヴン・レンバーク、高 知子、舘鼻則孝、寺澤季恵、中川周士、葉山有樹、松本勇馬、三浦史朗+宴 KAI プロジェクト、やまなみ工房、吉積彩乃

開催概要

GO FOR KOGEI 2025 テーマ | 工芸的なるもの

会期 | 2025 年 9 月 13 日 (土) -10 月 19 日 (日) [37 日間] 休場日 | 水曜

時間 | 10:00-16:30 (最終入場 16:00)

会場 | 富山県富山市 (岩瀬エリア)、石川県金沢市 (東山エリア)

主催 | 認定 NPO 法人趣都金澤、独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁

共催 | 富山県、富山市、北日本新聞社

後援 | 石川県、金沢市、JR 西日本、富山地方鉄道、北國新聞社、富山新聞社、MRO 北陸放送、石川テレビ放送、HAB 北陸朝日放送、北日本放送、富山テレビ放送、チューリップテレビ

2025 テーマ「工芸的なるもの」

アーティスティックディレクター 秋元雄史（東京藝術大学名誉教授）

GO FOR KOGEI 2025 では、「工芸的なるもの」というテーマのもと、作家や職人が素材・技法と向き合う態度から生まれるさまざまな実践を通して、それらが作り出す多様な暮らしの姿を提案していきます。

民藝運動の主唱者として知られる柳宗悦（1889–1961 年）は、論考「工芸的なるもの」*のなかで、車内アナウンスの抑揚や理髪師の缺さばきを「工芸的なやり方」だと記し、人の行為あるいは態度にさえ工芸性を見出しました。柳にとって工芸的なものとは、個人の自由な表現というよりも、社会全体で共有される美意識や様式に基づいたものであり、そこに美や価値が宿ると考えていました。有形無形を問わず、ものごとを工芸的と捉えることができるならば、「工芸」は今日私たちが想定する以上に社会とつながり、広がりをもったものとして立ち現れてきます。

一方で、社会全体が、共有してきたものを失っていったとしたら、柳の提唱した「工芸的なるもの」という概念は通用するのでしょうか。ある意味で、モダニズムは柳の考えとは全く逆の方向へと向かってきたと言えるかもしれません。こういったモダニズムの末期とも言える今日において、柳の概念を手掛かりに工芸と社会との関係を考えることには一定の意味があるでしょう。

GO FOR KOGEI 2025 では、作家や職人の工芸的態度を起点にして、制作された作品に留まらず、その過程で生まれる他者との関係性、作品を介して開かれるコミュニケーションや暮らしの場面といった社会的状況にも目を向けていきます。また、ある時には暮らしを下支えし、ある時には形作り、ある時には彩る、同じ素材が持つ多面的な展開も紹介します。こうした広がりの中に「工芸性」を想定することには、現在の、またこれからの工芸とアートの役割を見出す契機が潜んでいることでしょう。

*『工芸』第 8 号（1931 年）所載

秋元雄史

東京藝術大学名誉教授、金沢 21 世紀美術館特任館長、国立台南芸術大学栄誉教授、美術評論家。1955 年東京生まれ。東京藝術大学美術学部卒業。1991 年から直島のアートプロジェクトに携わる。地中美術館館長（2004–2006 年）をはじめ金沢 21 世紀美術館館長（2007–2017 年）、東京藝術大学大学美術館館長・教授（2015–2021 年）、練馬区立美術館館長（2017–2023 年）を歴任し、2021 年から「GO FOR KOGEI」の総合監修・キュレーターを務める。主なプロジェクト・展覧会に、「スタンダード」「直島スタンダード 2」（直島）、「第 1–3 回 金沢・世界工芸トリエンナーレ」（金沢、草屯・台湾）、「工芸未来派」（金沢、ニューヨーク・アメリカ）、「ジャポニズム 2018」の公式企画として「井上有一 1916–1985 —書の解放—」（パリ、アルビ・フランス）、「あるがままのアート-人知れず表現し続ける者たち-」（東京）など。著書に『アート思考』（2019 年、プレジデント社）など。



GO FOR KOGEI とは

GO FOR KOGEI は、ものづくりが古くから受け継がれる北陸から、ジャンルにとらわれない新たな工芸の見方を発信するプロジェクトです。2020 年のスタートからこれまで毎年開催し、地域の歴史・風土を体現する町並みや社寺を会場にした展覧会やイベントのほか、工芸を巡る今日的な課題と可能性について議論を深めるシンポジウムなどを展開してきました。既存概念にとらわれない豊かで広がりをもった姿を「KOGEI」という言葉とともに提示しながら、これからの工芸のあるべき「場」をさまざまな実践を通して作り出していきます。

今年のみどころ

工芸的アプローチが生み出す多面的な創作

18 組の多様な表現や活動を通して、「工芸的アプローチ」によって展開される多面的な創作のかたちを紹介します。素材や技術と真摯に向き合う態度に着目することで、既成概念にとらわれない、豊かで広がりのある表現の可能性を提示します。

「工芸的なるもの」に通底する価値観

柳宗悦が提唱した「工芸的なるもの」という概念を手がかりに、日常のあらゆる事象に工芸性を見出す視点を提示します。そこから、現代社会において私たちが共有している美意識や価値観とは何かを問い直します。

さまざまな関係性を探るキュレーション

作品そのものにとどまらず、制作過程で生まれる他者との関係性や作品を媒介にしたコミュニケーションなど、モノの背後にあるさまざまな関係性に着目してキュレーションを展開します。展示やイベントを通して、人—モノ—社会のつながりを解きほぐしていきます。



[出展作品] 三浦史朗 + 中川周士 (中川木工芸) 《回湯 風呂道具一式》2020 年 作家蔵 Photo : Yoshikawa Shinjiro

[参考作品] 相良育弥 ワークショップ風景「紡ぎのいずみ vol.2」(池上曾根史跡公園、2024 年) Photo: Lily Camera

[参考作品] 桑田卓郎 展示風景 桑田卓郎 + く「窯揚げうどん」(Gallery & Restaurant 舞台裏、2025 年) Photo: Kumi Nishitani

GO FOR KOGEI の特徴

「工芸」を現代的視点から再考する取り組み

GO FOR KOGEI は、近代化の中で台頭した「工芸」というフレームそのものを問い直し、歴史的に規定されたジャンルを通貫する、オルタナティブな評価軸を提案します。これまで工芸的なものとみなされてきた要素を再検証するとともに、アート、デザイン、建築といった隣接する“ジャンル”を横断しながら、私たちの価値観や日常に新たな視点をもたらすキュレーションを行います。素材や技法に根ざしながらも、現代的な問いを内包する作品の紹介や体験型のプログラムによって、来場者に発見や思考のきっかけを提供します。

「くらし」や「食」と連動するシームレスなアート体験

作品の鑑賞にとどまらず、工芸の特性を生かした地域の食文化や暮らしと結びついた体験型のプログラムが大きな特徴です。たとえば、老舗の酒蔵で工芸と利き酒を楽しんだり、地元食材を使った軽食を、作家の手がけた空間と器で味わう企画など、五感で楽しめるプログラムを多数用意しています。工芸が生活の中に息づいていることを実感でき、観るだけでなく「使う」「味わう」「触れる」ことで、日常と非日常の間を行ったり来たりするシームレスなアート体験ができるでしょう。

周遊しやすいコンパクト構成

富山・岩瀬エリア、金沢・東山エリアの古い蔵や酒蔵、町家など、地域の風景や建築の特性にあわせて溶け込むように設置した作品群が特徴で、まち並みや建築を回遊しながら楽しむスタイルです。ひとつのエリア内は基本的に徒歩で十分巡れるため、展示場所と工芸・アートが融合したスポットを気軽に鑑賞・体感できます。2つのエリアへは鉄道や車でアクセスしやすく、首都圏からも日帰り鑑賞が可能。また1泊2日であれば主要会場近辺のまち歩きも余裕をもって巡れるため、旅程を組みやすいのも魅力です。



昨年 GO FOR KOGEI 2024 の展示とイベント風景

左：サリーナー・サッタポン 《バレン(シアガ)アイピロング: 富山》2024 年

中：松山智一 展示風景

右：三浦史朗+宴 KAI プロジェクト イベント風景 宴 KAI プロジェクトー淋汗草事ー松

展示エリアと各アーティスト

岩瀬エリア（富山県富山市）

富山駅から車で北へ約 15 分の距離にある岩瀬エリア。北前船の寄港地として栄えたこの地には、今も廻船問屋の建物が立ち並び、往時の面影を色濃く残しています。近年、日本酒の酒蔵「枳田酒造店」が中心となり、新しいまちの姿を形づくろうとする動きが見られます。ミシュランガイドで星を獲得した飲食店や、国内外で活躍する工芸作家のアトリエやギャラリーが点在するようになり、伝統を礎に今日的な美意識のもとで新たな姿に再生しようとしています。

アーティスト：アリ・バユアジ、桑田卓郎、サエボーグ、坂本森海、清水千秋、
清水徳子+清水美帆+オィウン・レンバーグ、高知子、舘鼻則孝、葉山有樹、松本勇馬、吉積彩乃



[参考作品] アリ・バユアジ 展示風景「瞑想の行為」（カナダ大使館高円宮記念ギャラリー、2025 年）

[参考作品] 桑田卓郎 展示風景 桑田卓郎＋「窯揚げうどん」（Gallery & Restaurant 舞台裏、2025 年）Photo: Kumi Nishitani

[参考作品] サエボーグ 《Pigpen Movie》2016 年 Photo: Takeo Hibino



[参考作品] 坂本森海 《豚を食べるための窯》2025 年 陶作家蔵 展示風景「坂本森海：火と土と食べたいもの」（京都市京セラ美術館ザ・トライアングル、2025 年）Photo: Moriya Yuki

[出展作品] 清水千秋《タイトル不明》2022 年 アクリル、紙 やまなみ工房蔵

[出展作品] 清水徳子《The Danger Museum》2002 年 刺繍糸、ビーズ、スパンコール、アクリル、木綿、コードデュロイ 作家蔵
© Gottingham. Image courtesy of Miho Shimizu and Studio Xxingham

[出展作品] 高知子《ミームプロジェクト》2024-25 年 糸、木綿、帆布 個人蔵



[出展作品] 舘鼻則孝《ディセンディングペインティング“雲龍図”》2024 年 アクリルエマルジョンペイント 個人蔵 展示風景「GO FOR KOGEI 2024」（枳田酒造店 満寿泉、2024 年）Photo: Watanabe Osamu

[出展作品] 葉山有樹《双龍》2023 年 アルミ複合板 個人蔵 Photo: Watanabe Osamu

[参考作品] 松本勇馬《母乳》2025 年 稲藁、木材、竹 個人蔵 展示風景「食と生きる」（東京ミッドタウン日比谷、2025 年）

[出展作品] 吉積彩乃《ICON#2407 No.3》2024 年 ガラス 作家蔵 Photo: Nanbu Miki

展示エリアと各アーティスト

東山エリア（石川県金沢市）

金沢を代表する観光地「ひがし茶屋街」を擁する東山エリア。江戸時代末期から明治時代にかけて建てられた茶屋様式の町家が多く残されており、その端正な町並みは国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。また賑わう表通りの裏手では、かつてさまざまな職人が工房の軒を連ねて、制作に勤しんでいたそうです。現在も、昔ながらの住宅街の中に隠れ家的なカフェやギャラリーが点在し、工芸と暮らしが密接に結びついた姿を垣間見ることができます。

アーティスト：上出恵悟、コレクティブアクション、相良育弥、寺澤季恵、中川周士、三浦史朗+宴 KAI プロジェクト、やまなみ工房



〔参考作品〕 上出恵悟《五浦_1》2024 年 油彩、キャンバス 作家蔵

〔参考作品〕 コレクティブアクション《民藝スピリット「貧」》2024 年 個人蔵 Photo: Kotaro Tanaka

〔参考作品〕 相良育弥+長坂常（スキーマ建築計画）《YATAI2》2025 年 単管足場、葦 個人蔵
Photo: Thomas Adank, courtesy of KUSAKANMURI, Ltd.



〔出展作品〕 寺澤季恵《生生 2》2024 年 ガラス、鉄 作家蔵

〔参考作品〕 中川周士《木桶の茶室》2024 年 杉 作家蔵

〔出展作品〕 三浦史朗+中川周士（中川木工芸）《回湯 風呂道具一式》2020 年 作家蔵 Photo: Yoshikawa Shinjiro



〔参考作品〕 やまなみ工房 展示風景

イベント

作品の展示以外にも、工芸をより深く知るためのイベントを多数実施予定です。食とのコラボレーションや「つかう」「触れる」体験を通し、工芸のもつ多様な価値を体感ください。下記以外にも、岩瀬エリア・東山エリアで合計 10 種程のイベント開催を予定しています。詳細はウェブサイトで 8 月上旬に発表いたします。

「うつわと楽しむ蕎麦屋の新しいスタイル」桑田卓郎、酒蕎楽 くちいわ



日時：不定休、18:00～のみ

会場：酒蕎楽 くちいわ（富山市東岩瀬町 135 裏）

予約：要予約

〔展示風景〕 桑田卓郎＋く「窯揚げうどん」（Gallery & Restaurant 舞台裏、2025 年）Photo: Kumi Nishitani

概要：陶芸家・桑田卓郎さんと、岩瀬の街並みに佇む蕎麦屋「酒蕎楽 くちいわ」による、GO FOR KOGEI 期間限定のコラボレーションです。完全予約制の「くちいわ」は、蕎麦を中心に素材の持ち味を引き出す繊細な料理で、地元の常連客から観光客まで幅広く愛される評判の一軒。今回初めてアーティストとの共演に挑み、桑田さんの鮮やかなうつわとともに新しいスタイルの蕎麦のコース料理を味わうことができます。店内には、桑田さんの工房から選りすぐった作品も展示予定。大衆に親しまれてきたクラシックな蕎麦と現代アートの「火と油」的コラボレーションをお楽しみください。

※完全予約制

「能登の土から生まれた七輪でふるまうバーベキュー」坂本森海



日時：10 月 19 日（日）13:00～16:00

会場：New An 蔵（富山市東岩瀬町 336 裏）

概要：今回「温かみを持ち運ぶ」という発想から七輪を制作した坂本森海さんは、土砂災害に見舞われた能登・珠洲市に滞在し、ボランティア活動を行いながら現地の土を採取しました。その土を素材にした七輪で、能登の塩を添えたや旬の野菜やきのこを焼き、来場者に振る舞うイベントを開催します。会場は、坂本さんの作品が展示されている New An の裏手の蔵、その横の屋外スペースを予定。坂本さんご本人から制作の背景や作品について直接話を聞ける貴重な機会です。自然素材と地域の恵みを味わうひとときをお楽しみください。※提供数に限りがあるため、先着順となります。

チケット（共通パスポート）

券種	一般	学生（大学生・専門学生）	高校生以下
前売り券（～9月12日まで）	2,000 円	1,800 円	無料
当日券	2,500 円	2,000 円	

* 共通パスポートでは、会期中すべての展示会場に1回ずつ入場できます。

* チケットはオンラインもしくはインフォメーションセンター（会期中のみ）で購入できます。

* 障害者手帳またはミライロ ID をお持ちの方とその付添者(1名)は無料です。

* 各エリア内の展示会場に受付当日に限り1回ずつ入場できる「エリア別1DAYチケット」は、会期中に販売します。

発売場所

GO FOR KOGEI ウェブサイト（7月15日～10月19日）

<https://art-ap.passes.jp/user/e/gfk2025/>

インフォメーションセンター（現地販売・会期中のみ）

アクセス

展示会場は岩瀬エリア（富山県富山市）と東山エリア（石川県金沢市）に点在しています。鑑賞ご希望の方は、各エリアのインフォメーションセンターまでお越しください。

■岩瀬インフォメーションセンター

桝田酒造店 満寿泉（富山県富山市東岩瀬町 269）

富山駅から電車と徒歩で約 30 分

電車 | 富山地方鉄道 富山港線「東岩瀬駅」から徒歩約 5 分

駐車場 | 富山港展望台（10 台・無料）、

岩瀬カナル会館（75 台・無料）

■東山インフォメーションセンター

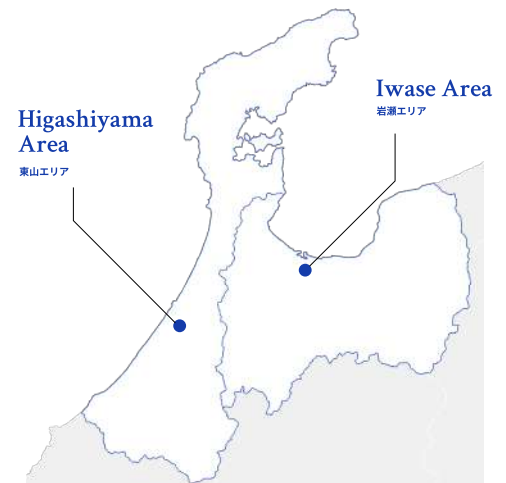
HATCHi 金沢 by THE SHARE HOTELS（石川県金沢市橋場町 3-18）

金沢駅からバスと徒歩で約 10 分

バス | 城下まち金沢周遊バス・北陸鉄道バス・西日本 JR バス

「橋場町」バス停から徒歩約 3 分

駐車場 | 東山観光駐車場（15 台・有料）



【本リリースに関するプレス問い合わせ先】

取材・掲載の際には、下記までご連絡ください。

西谷・多胡（リレーリレーLLP） 電話：090-2062-6963 e-mail：press_81@relayrelay.net

添付資料

岩瀬エリア展示アーティスト プロフィール

アリ・バユアジ

1975 年モジョケルト（インドネシア）生まれ。インドネシアで土木工学を学んだバユアジは、技師としての就業を経て、モントリオール
のコンコルディア大学にて美術を学んだ。アーティストとしてのキャリアの初期より世界各地での滞在制作を行い、各地に根ざした物語や
歴史、環境問題を主題に、自然物や既製品を用いたインスタレーションを多く手がけてきた。
「Weaving the Ocean（海を織る）」は、モントリオールとバリ島を行き来していたバユアジが、新型コロナウイルス感染症（COVID-
19）の移動制限により島から出られなくなった際に立ち上げたプロジェクトである。海岸に漂着したナイロン製の魚網を素材に、バリの
伝統技法をもつ職人たちの協働を通じて、繊細なタペストリーへと昇華させた。本プロジェクトを通して、バユアジは観光に依存しない
バリ島における持続可能な経済や資源の活用の方を提示している。しかし、こうした今日的な課題を単なる批評にとどめることなく、
むしろそれらを作品制作の一部として捉え、美的かつ協力的な実践として表現に取り込んでいるのが特徴であろう。
主な展覧会に、個展「海の音」（ミヅマアートギャラリー、2025 年）、「瞑想の行為」（カナダ大使館高円宮記念ギャラリー、2025
年）、グループ展「清州クラフトビエンナーレ（韓国、2023 年）」、「バンコクアートビエンナーレ」（タイ、2024 年）など。作品はモン
トリオール美術館やケベック国立美術館などに収蔵されている。

桑田卓郎

1981 年広島県生まれ。2001 年に京都嵯峨芸術大学短期大学部（現：嵯峨美術短期大学）を卒業後、2007 年に多治見市陶磁器意匠研究所
を修了。桑田は、これまでの陶芸の枠組みを超えた新たな表現を追求している作家である。カラフルでポップな色彩を用いつつ、伝統的な
技法である「梅花皮」や「石爆」「点滴」などを過剰に施すことで、独自の視覚言語を構築してきた。一方で、巨大な彫刻作品にも「茶坑
（ちゃわん）」と名付けるなど、日本における茶の湯文化などの伝統と自身の実践とをシームレスに捉えている。近年では、陶芸の原点と
もいえる「食」へと回帰し、多治見で培われた量産技術を用いたクラフトライン「く」を立ち上げた。暮らしに寄り添う器から、日常から
かけ離れた彫刻的造形まで幅広く取り組む桑田は、その両極を行き来することで、それぞれの領域に新たな視点と創造性をもたらしてい
る。
主な展覧会に、個展「Together Shiyoze! (Let's Get Together!）」（Salon 94・アメリカ、2025 年）、「窯上げうどん」（Gallery &
Restaurant 舞台裏、2025 年）、「Strange Clay: Ceramics in Contemporary Art」（Hayward Gallery・イギリス、2022-2023 年）など。
主な受賞歴に、「LOEWE Craft Prize 2018」特別賞（2018 年）、「2021 年度日本陶磁協会賞」（2022 年）など。作品は、ルベル・ファ
ミリー・コレクションをはじめシカゴ美術館、パームスプリングス美術館、金沢 21 世紀美術館など世界各地のパブリックコレクションに
収蔵されている。

サエボーグ

1981 年富山県生まれ。2006 年に女子美術大学芸術学部絵画学科洋画専攻（現：美術学科洋画専攻）を卒業。サエボーグは、自作したラテ
ックス製のボディースーツで身体を拡張させ、鑑賞者と共に家畜や虫などのキャラクターに扮するパフォーマンスを行ってきた。まるで玩
具を拡大したかのような巨大な農場のランドスケープの中で、付与された役割を演じるその姿は、一見楽しげではあるが、家畜や農場は自
らの「生」あるいは「性」を徹底的に管理された人間社会のメタファーであり、ジェンダーや介護、生命の再生産や消費への痛烈な批評を
含んでいる。サエボーグの用いるラテックスという素材は、非常に繊細で傷みやすく、制作過程においても、また作品として完成してから
も「お世話（ケア）」が不可欠である。作品を物質的に「生存させる」ために必要となるケアや管理という概念は、彼女の表現全てに通底
していると言えるだろう。
主な発表に、「DARK MOFO 2019」（Avalon Theatre・オーストラリア、2019 年）、「あいちトリエンナーレ 2019 情の時代」（愛知県
芸術劇場、2019 年）など。また展覧会に、個展「サエボーグ Enchanted Animals」（黒部市美術館、2024 年）、グループ展「The 6th
Athens Biennale: ANTI」（Banakeios Library・ギリシャ、2018 年）、「Reborn-Art Festival 2021-22」（桃浦、2021 年）など。受賞歴
に「Tokyo Contemporary Art Award 2022-2024」や「第 17 回岡本太郎現代芸術賞」岡本敏子賞（2014 年）。

坂本森海

1997 年長崎県生まれ。2019 年に京都造形芸術大学（現：京都芸術大学）美術工芸学科総合造形コースを卒業。在学中より陶芸家のアシス
タントとして作陶を学び、各地の土や石を自らの手で掘り出し、自作の土窯で作品を焼成してきた。その中で、制作から使用に至る「陶
芸」のプロセスそのものに着目し、それを作品化する試みを展開している。近作《火と土と食べたいもの》では、粘土をこね、窯を成形・
焼成し、その窯で調理し食べる、それら一連の流れをストップモーション・アニメーションで映像化し、完成した窯とともに展示した。こ
の取り組みについて、坂本自身は「私がみたいのは、土器そのものではなく、食べたいものと土と火が分かち難く混ざり合った、土器のそ
の瞬間だ」と記しているように、陶芸に内在するさまざまな事象や、そこから派生する「食」という人間の根源的な行為、またそれを通
じて生まれる人間や動物の関係性といったものが混ざり合う瞬間へと立ち返ることで、「陶芸」の枠組みを解体・再構築しようとしてい
る。
主な展覧会に、個展「坂本森海：火と土と食べたいもの」（京都市京セラ美術館 ザ・トライアングル、2025 年）、「器、人に似ている」
（ギャラリーマロニエ、2018 年）、グループ展「半井桃水館芸術祭 シャンデリア」（半井桃水館、2024 年）、「ATAMI ART GRANT
2023」（熱海駅地下通路、2023 年）など。

清水千秋

1967 年滋賀県生まれ。1987 年から「やまなみ工房」に所属。清水は、これまで 30 年近く刺繍作品の制作に取り組んできた作家である。
清水が選ぶモチーフは、テレビ番組や雑誌で見かけたタレントや映画のキャラクター、名画に描かれた人物など多岐にわたる。工房の施設
長や母親といった身近な人々も題材となるが、清水にとっては画面越しに出会う人物も目の前にいる人物も、等しく愛すべき存在であり、
刺繍の主題となる。下絵を布地に描き起こすと、清水はチェーンステッチで輪郭を縁取り、絵に色を塗るかのように縫い進めていく。その
糸には鮮やかな色彩が多く使われ、フォーヴィスムを喚起させる大胆な色使いが特徴的である。モチーフとなった人物は、清水の独自の視
点によってしばしば本来の姿とは異なる様相を帯びるが、そこにはわれわれの認識の揺らぎを誘うようなイメージの転換がある。
2020 年頃から刺繍を行うことが困難になったため、筆によるドローイングを始めた。認知症の進行により、何を描いているか他者が判別
しがたい作品も少なくないが、その筆致は荒々しくも自由で、喚起力に満ちている。その表現は、因習的な意味や解釈を拒む絵画表現を追
求したゲオルク・バゼリッツを彷彿とさせる。主な展覧会に、「糸で描く。布に描く。」（もうひとつの美術館、2025 年）、「ミュージ
アム・オブ・トゥギャザー」（スパイラル、2017 年）など。

清水徳子+清水美帆+オヴィン・レンバーク

清水徳子は 1948 年東京都生まれ。徳子はいわゆる職業作家ではないものの、美術や歴史、さまざまな文化に関心を寄せながら、油絵や日
本画、刺繍など多様な技法を貪欲に探究する中で、独自の表現方法を築いてきた。テキストイルポスターの制作は、娘でありアーティスト
の清水美帆が、「Danger Museum（オヴィン・レンバークとの協働）」の活動として 2002 年にロンドンで展示を行うにあたり、そのポ
スター制作を徳子に依頼したことに端を発する。非-欧米人かつ非-男性である美帆が、あえて非-アーティストである母親、そして当時は
アートの文脈において広く受け入れられていなかった「刺繍」による作品を展示に持ち込むことで、アートワールドの中心地に対する批評
的姿勢を示そうとする試みであった。当初は一度限りで想定された母娘とのコラボレーションは、その後約 10 年にわたり継続し、20 点を
超える作品が制作された。いずれも印刷物として量産されるポスターとは異なり、全てが手仕事による一点ものの作品である。美帆とオ
ヴィンから送られてきた展覧会の基礎情報と簡易な構図を頼りに、徳子自身の想像力によって膨らまされたイメージが丹念に縫い込まれてい
る。2022 年には、それらの作品のカタログレゾネとして『清水徳子のテキストイルポスター』（Flick Studio、2022 年）が刊行され、ま
たその出版記念として展覧会「TEXTILE POSTERS」（HAGISO、2022 年）が開催された。

高 知子

1973 年石川県生まれ。高は幼少期より手芸に親しみ、独学で刺繍を学んできた手芸作家である。雑貨屋勤務を経て、2011 年にアトリエ兼ショップ「taffeta (タフタ)」を石川県金沢市内に開設。花や幾何学模様を主題にした刺繍作品を手がけ、国内外で個展やグループ展を通じて積極的に作品を発表してきた。2024 年に発生した令和 6 年能登半島地震を機に、彼女が生まれ育った輪島市および能登地域に住む子どもたちを支援するために「ミームプロジェクト」を立ち上げた。同プロジェクトは、子どもたちがトートバッグに描いた絵を、高が刺繍にして贈り返すというものである。さらに、震災により書店が閉鎖された地域の状況を受け、その図案から連想される絵本（全国各地から寄付されたもの）を添えて届ける取り組みも行っている。これまでに 300 点を超えるトートバッグを制作しており、1,000 点を一つの節目として今後も継続を予定している。「ミームプロジェクト」という名称は、高の出身地である三井町と母の名前に由来しており、震災を契機に故郷や家族との関係を見つめ直すプロジェクトであることが伺える。主な展覧会に、個展「自由研究 刺繍研究」(homespun STRIP ROOM、2023 年)、や「刺繍、形と色」(雨乃日珈琲店・韓国、2019 年)。著書に『花と幾何学もようの刺繍』(文化出版局、2014 年)がある。

館鼻則孝

1985 年東京都生まれ。2010 年に東京藝術大学美術学部工芸科染織専攻を卒業。館鼻は創作活動の概念として「Rethink (リシンク)」を掲げ、日本における伝統文化や工芸の技法を活用して現代の価値観を表現する現代美術家である。花魁の高下駄から着想を得て制作された代表作《Heel-less Shoes》は、米国歌手のレディー・ガガに愛用されたことでも世界的に知られている。また、2016 年にはカルティエ現代美術財団にて開催された人形浄瑠璃文楽の公演において監督を務めるなど、ジャンルにとらわれない幅広い活動を展開している。昨年の GO FOR KOGEI では、《Heel-less Shoes》をはじめ、酒造場の床面に描かれた巨大な絵画作品《Descending Painting “Unryu-zu”》を発表した。本作は、来迎図に着想を得て制作されたものだが、館鼻の代名詞とも言える二つのモチーフ「稲妻」と「雲」を用いながら「天と地」や「生と死」などの一対の要素として描くことで、仏教と神道双方の価値観が共存する神仏習合が表現されている。主な展覧会に「Future Beauty 日本ファッションの未来性」(東京都現代美術館、2012 年)、「呪力の美学」(岡本太郎記念館、2016 年)、「Items: Is Fashion Modern?」(ニューヨーク近代美術館・アメリカ、2017 年)、「和巧絶佳」(パナソニック汐留美術館ほか巡回、2020 年)、「江戸東京リシンク展」(旧岩崎邸庭園、2024 年)など。メトロポリタン美術館やヴィクトリア&アルバート博物館などに作品が収蔵されている。

葉山有樹

1961 年佐賀県生まれ。1975 年より有田の窯元で修業を積み、1985 年に「葉山有樹窯」を開窯。葉山は、肥前陶磁の伝統に根差した超人的な技巧をもつ陶芸家であると同時に、小説や童話などを手掛ける著述家でもある。さまざまな歴史・文化に触発された物語を執筆し、その創作過程で脳裏に浮かんだ情景を絵付けによって磁器に表現してきた。その作中では、古代メソポタミアやエジプト、中国など、日本に留まらない多様な文明が参照されており、またマンガやアニメといった現代を生きる葉山のリアリティと美意識が投影されている。これまでは大皿や壺を中心に制作してきたが、絵付けを自らの手で描くことによる技術的制約を超えるべく、近年では転写技術を導入し、その表現を建築的なスケールにまで拡張する。強い具体性をもつ細密描写の世界は、磁器という枠を超えて、新たな展開を迎えている。GO FOR KOGEI 2023 で発表された《双龍》は、その一例と言えるだろう。主な展覧会に、個展「一虹の彼方に―葉山有樹展」(水戸市民会館、2025 年)、「BEAUTY OF LIFE」(Ippodo Gallery・アメリカ、2016 年)、グループ展「工芸未来派」(金沢 21 世紀美術館、2012 年)、「三人展―Forward Stroke 明日への眼差し―」(佐賀県立美術館、2018 年)。著作に『短編小説 種子集』(ブイツーソリューション、2012 年)ほか。金沢 21 世紀美術館に作品が収蔵されている。

松本勇馬

1977 年群馬県生まれ。2000 年より新潟で開催される「大地の芸術祭」にサポーターとして関わる中で藁による彫刻と出会い、現在は独立して作家活動を行っている。松本は、作品制作で用いる藁が穀物の副産物であることに着目している。米や麦といった穀物は、人類の生存を支えてきたが、その副産物である藁もまた、かつては燃料や飼料、また履物や建材などとして用いられ、生活に欠かせないものであった。そうした素材で象る彫刻は、人類の農耕文化そのものを象徴するものと彼は捉える。また松本の制作は、基本的に展示場所の地域住民との協働によって行われる。作品のスケールが人の身の丈を超えることもその理由の一つだが、それ以上に、参加者一人ひとりの能力を持ち寄りながら制作を進めるという過程に、農耕における協働の記憶が重ねられている。彼の主たるモチーフは動物である。藁の有機的な質感が生き物の毛並みを想起させるためでもあるが、同時に「穀物の抜け殻」である藁で生命の形象をつくることにより、生と死という生命の二重性を表現している。主な作品展示に「食と生きる」(東京ミッドタウン日比谷、2025 年)、「第 29 回 UBE ビエンナーレ (現代日本彫刻展)」(ときわ公園、2022 年)、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2015」(十日町市、2015 年)、「瀬戸内国際芸術祭 2013」(玉野市、2013 年)など。

吉積彩乃

1991 年愛知県出身。2014 年に武蔵野美術大学造形学部工芸工業デザイン学科ガラス専攻を卒業、2016 年に富山ガラス造形研究所造形科を修了。2019 年より 2022 年までオーストラリアのガラス工房で制作を行い、現在は富山県を拠点に活動する。吉積は、金型を用いた吹きガラスを軸に、ガラスによる絵画的表現を探索する作家である。矩形に整形されたガラスを「三次元のキャンパス」と捉え、色ガラスの重層性やエナメルなどによる直接的な描画で色彩を構成していく。その表現は、フォーヴィスムから強く影響を受けた感情的で力強い色彩と、溶けたガラスがもたらす偶発性を取り入れたアプローチが特徴であるが、一方で、透明性と有機的な形態はガラス特有のマチエールに依るものだ。これら三次元の絵画は、作品の表裏だけではなく、中空に吹かれた内と外が複雑に交錯することで、鑑賞者の位置や視点の動きに応じてさまざまな表情を立ち上がらせる。吉積は、ガラスという素材と真摯に向き合うことから生まれる豊かな色彩表現を通して、アートや工芸といったジャンルにとらわれない独自の表現を切り拓いている。主な展覧会に個展「Ayano Yoshizumi Solo Exhibition」(P/OP SHIBUYA、2024 年)、「MAKE IT POP」(富山ガラス工房、2023 年)、グループ展「Gathering 一つなぐ創造力」(富山市ガラス美術館、2025 年)。主な受賞歴に、「Tom Malone Prize 2021」大賞(2021 年)。西オーストラリア州立美術館やタコマガラス美術館などに作品が収蔵されている。

東山エリア展示アーティスト プロフィール

上出恵悟

1981 年石川県生まれ。2006 年に東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻を卒業。同年より、1879 年創業の九谷焼窯元・上出長右衛門窯の後継者として、職人と協働しながら伝統の枠に囚われないユーモラスな発想で九谷焼を現代に伝えている。2013 年には合同会社上出瓷藝を設立し、それを機に本格的に窯の経営に携わるようになる。その中で、上出は古典的な染色技法である「筒描」を用いて企業の商品企画やパッケージデザイン、アパレルブランドとのコラボレーションなどを手がけてきた。一方で、美術作家・画家としても精力的に活動しており、大学で学んだ油画に加えて、水墨画や瓷板画、磁土を用いた彫刻的作品など多様な技法を用いた表現に取り組んでいる。その活動は、九谷焼の枠を越えた展開を見せている。窯元としての役割と個人としての表現とを使い分けながら柔軟に横断することで、両者が関係し合い、それにより個々の活動も際立って浮かび上がってくる。それこそが上出の活動の特徴であるだろう。主な展覧会に、個展「Izura」(東京藝術大学 藝大アートプラザ、2024 年)、「Windows」(東福寺塔頭光明院、2024 年)、や「新蕉」(Yoshimi Arts、2022 年)、グループ展「座辺の現代美術 -景-」(大徳寺瑞峰院、2024 年)、「第 5 回金沢・世界工芸トリエンナーレ」(金沢 21 世紀美術館、2022 年)など。作品は、金沢 21 世紀美術館や高橋龍太郎コレクションなどに収蔵されている。

コレクティブアクション

コレクティブアクションは、美術家であり、自然布の蒐集家・研究家として知られる吉田真一郎と、キュレーターの秋元雄史によって結成されたアーティストコレクティブである。同コレクティブの活動歴として、2024 年にパリで開催されたアートフェア「Asia NOW 2024」にて《民藝スピリット「貧」》の展示を行った。そこでは、江戸時代から明治時代までに制作された自然布の仕事着を通じて民藝的な美を再評価し、今日のインスタレーションとして提示した。これらの着物に用いられた布は、野山に自生する、あるいは人の手によって栽培された植物（葛、芭蕉、大麻など）から繊維をとり、時に使い古された紙などと撚り合わせ、織られたものである。公家や武家の文化から生まれる金満的な美とは異なり、そこには無駄を削いだ庶民の暮らしのなかで育まれた「貧」の美が立ち上がる。それらは、現代社会とも共有可能なエコロジカルなものづくりである一方、個に依らない集団性の中から生まれる新たな可能性を内包している。

吉田真一郎は、1948 年京都府生まれ。かつては白を追求するペインティングを制作していたが、ヨーゼフ・ボイスとの出会いから制作そのものを見直し、古美術や民俗学を学び、「白の探求」という視点から苧麻布や大麻布の研究や収集・発表を 40 年以上にわたって行ってきた。GO FOR KOGEI 2022 の特別展「つくる一土地、くらし、祈りが織りなすもの」（勝興寺、2022 年）にも出展した。

相良育弥

1980 年兵庫県生まれ。相良は、兵庫県神戸市を拠点に、伝統的な民家や文化財の屋根葺きから現代的な内装や装飾まで、幅広く手がける茅葺き職人である。かつてはヒップホップの DJ など自然と遠い世界にいたが、宮澤賢治による『農民藝術概論』と出会い、自然風景に溶け込む実践者「百姓（暮らしに必要とされる百の業を持つ者）」を目指すこととなった。茅葺き職人の道を選んだのは、「植物を刈りとり、お屋根に葺いて、使い終わったら土に還せる」からだと言及する。2008 年には「淡河茅葺き屋根保存会くさかんむり」を立ち上げ、2019 年に法人化し、「株式会社くさかんむり」となる。茅葺き文化を普及させるべく、ワークショップやセミナーも精力的に開催している。近年は、茅葺きの更なる可能性を探究すべく、その技術に内在する美を表現するアートワークの制作も行い、国内外から高く評価されている。

主な活動歴に、肥土山農村歌舞伎舞台（香川県、2022 年）や下木家住宅（香川県）など国指定の重要文化財をはじめとする屋根の茅葺きがある。展覧会に、「Life is Beautiful: 衣・食・住」（GYRE gallery、2023 年）、「KAYABUKI -Thatching for Tomorrow-」（Lugtje Gallery・オランダ、2023 年）など。主な受賞歴に、「LOEWE Craft Prize 2024」ファイナリスト（2024 年）、「ジャパンアウトドアリーダーズアワード 2020」優秀賞（2020 年）、「平成 27 年度 神戸市 文化奨励賞」（2015 年）など。

寺澤季恵

1997 年 静岡県生まれ。2020 年に多摩美術大学工芸学科を卒業後、富山ガラス造形研究所（研究科）に進学。2025 年 3 月に金沢卯辰山工芸工房を修了し、現在は金沢市内で制作している。寺澤は、一貫して「生命」をテーマに作品制作を行うガラス彫刻作家である。主に吹きガラスの技法を用いる寺澤は、溶解したガラスが自身の呼吸によって膨らむ様に見出し、手の内で蠢くマテリアルに寄り添いながら造形を行ってきた。彼女の代表作とも言える《生生》シリーズでは、反復的に増殖するガラスと、錆びた鉄などの異素材を組み合わせたことで、果実に、あるいは臓器にも似た特異な生命を表現している。その姿は一見すると不気味さを帯びているが、腐敗や死といった負の側面から「生」を捉え直すという寺澤ならではの視点が色濃く反映されている。しかし、それら表現の根底には、素材としてのガラスが本来備える繊細さが宿っており、腐敗や死といったイメージと対をなす、生命の美しさや力強さを浮かび上がらせる。

主な展覧会に、個展「生生（ショウジョウ）」（Gallery O2、2024 年）、グループ展「ARTISTS' FAIR KYOTO 2025」（京都新聞ビル、2025 年）、「Hysterik Nature」（三越コンテンツギャラリー、2022 年）、「KUMA EXHIBITION」（ANB Tokyo、2022 年）など。2021 年には公益財団法人クマ財団による活動支援（5 期生）に選出。受賞歴には「SICF22 EXHIBITION 部門」準グランプリ（2021 年）、「第 79 回金沢市工芸展」金沢市長奨励賞（2023 年）など。

中川周士

1968 年京都府生まれ。1992 年に京都精華大学美術学部立体造形専攻を卒業。卒業と同時に重要無形文化財保持者でもある父・清司に師事し、2003 年に滋賀県大津市にて中川木工芸 比良工房を開く。中川は、室町時代から続く伝統的な桶づくりを中心に、手作りの木製品を制作している。かつて日本における木桶は、産湯に使う桶から棺桶まで、生涯にわたり人々の生活に寄り添う身近な道具であったが、高度経済成長期を経てそれらの大半はプラスチック製品などに代わった。そうした状況のなかで、中川は歴史ある木工技術を継承しながらも、国内外のデザイナーやアーティストとのコラボレーションを通じて、木桶の新たな可能性を模索し続けている。特に木桶のもつアーチ構造と建築に親和性があることに着目し、その第一歩として取り組んだのが《木桶の茶室》である。伝統的なタガ締め技法を用いた本作は、短時間で設置・解体ができるポータブルなものであり、どのような環境のもとでも茶室空間を作り出すことができる。

主な展覧会に、個展「茶の杜に惑ふ」（アートスペース福寿園、2024 年）、グループ展「ジャポニスムの 150 年」（パリ装飾美術館、2018-2019 年）ほか。主な受賞歴に、「LOEWE Craft Prize 2017」ファイナリスト（2017 年）、「日本伝統工芸再生コンテスト」ロニー賞（2023 年）など。ウィクトリア&アルバート博物館とパリ装飾美術館に作品が収蔵されている。

三浦史朗+宴 KAI プロジェクト

三浦史朗は、1969 年京都府生まれ。1995 年に早稲田大学理工学部（現：創造理工学部）建築学科および大学院を修了後、数奇屋大工棟梁の中村周二に師事。その後、「とぶう」「三角屋」を立ち上げ、個人住宅から店舗の設計・施工まで幅広く手がけてきた。現在は「六角屋」の代表として、建築の企画・設計・デザイン監修にとどまらず、地域づくりのプロデュースにも取り組んでいる。「宴 KAI プロジェクト」は、三浦が中心となり、大工や木工、紙、竹など多様な素材を扱う職人たちと協働し、それぞれの素材に特化した新たな「ものづくり」を実践する取り組みである。2019 年の「KAI-KI」を皮切りに、これまでに 8 つのプロジェクトを展開してきた。それらの取り組みの中で、三浦は素材の特性や職人の技術を最大限に引き出すために、さまざまな関係項を編み直す「構匠（こうしょう）」として関わってきた。そのアプローチは、図面に基づき構築的に創出される点において建築的でもあり、同時に職人の「手の内」から生まれる点において工芸的でもある。こうした両立を架橋するプロデュースは、数奇屋建築に深く関わってきた三浦ならではの実践であると言えるだろう。

宴 KAI プロジェクト

KAI-KI | 大井光太郎（大井）、三角屋、AIR FRAME
KAI-RO | 小西忠行（小西工務店）、岡田 正（美正堂岡田表具店）
KAI-SHI | 嘉戸 浩（かみ添）
KAI-TOU | 中川周士（中川木工芸）
KAI-CHIKU | 下本一歩（竹と）、岡部創太（家具設計製作所コモン）
KAI-SOU、KAI-SOU iori | 村松正晴（M Produce）、上野和広（NUNO）
KAI-SEKI | 宇佐見透（Cazahana）、山本雅二（ヤマト）
KAI-KOU | 原田弥（三幻色）、松本大輔（ライティングルーツファクトリー）

やまなみ工房

1986 年に「やまなみ共同作業所」として滋賀県甲賀市に開所。1990 年、下請け中心の生産活動から創作活動を支援する施設へと方針を転換した。そのきっかけとなったのは、内職作業の合間に一心不乱に絵を描いていた一人の利用者の姿であった。この出来事を契機に、社会への適応や生産性を求めるのではなく、利用者一人ひとりの個性や自主性を尊重しながら、各自のペースで行う表現活動の支援に力を注ぐようになった。開設当初は 3 名だった利用者は、現在では 90 名を超える。

ここで生み出される作品は、国内外の展覧会で紹介され、ポンビドー・センターをはじめとする美術館のパブリックコレクションにも収蔵されている。工房の日常や制作風景を追ったドキュメンタリー映画《地蔵とリビドー》（2018 年）の公開をはじめ、施設内のギャラリー・カフェ・菓子工房の開設など、創作を起点とした活動の輪が広がっている。また、やまなみ工房で生み出された絵画作品をテキスタイルデザインに展開するファッションブランド「DISTORTION3」をはじめ、多様なジャンルのクリエイターとの協働も積極的に行っている。さらに、商品パッケージに作品イメージが二次利用されるなど、企業とのコラボレーションにも広がりが生まれている。

GO FOR KOGEI としての海外展開

例年北陸で開催してきた芸術祭と並行し、2025年度は7月にイギリスでの国際シンポジウムを開催するほか、台湾の台南市美術館からの招待を受け、10月より展覧会を開催する予定です。今後は、国内にとどまらず海外へも活動の幅を広げてまいります。

イギリスでの展開

GO FOR KOGEI シンポジウム 2025

工芸の新たな伝統への挑戦：領域を超えた現代アーティストの活力に満ちた活動性



イギリス・ロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館（V&A）と共同で、「GO FOR KOGEI シンポジウム 2025」を開催します。

本シンポジウムでは、工芸におけるジェンダーの壁を破り、領域分野を越える現代アーティストの活力に満ちた創造性に焦点をあて、アーティスト、キュレーター、研究者を含む発表者が、ジェンダー、領域、地域文化の価値、現代の視覚文化等の観点から、“工芸の現在地”について分野横断的な議論を展開します。

基調講演

グレン・アダムソン(キュレーター・アット・ラージ、ヴィトラデザインミュージアム)

登壇者

ジョアンナ・ノーマン(V&A 研究所所長、V&A 国立美術図書館・公文書館館長)、菊池裕子(V&A 研究所 学術部長)

山田雅美(V&A アジア部門キュレーター)、佐々木類(アーティスト、ガラス)

スーザン・ロス(アーティスト、漆)、牟田陽日(アーティスト、陶芸)

細野仁美(アーティスト、陶芸)、岩村遠(アーティスト、陶芸)

川井雄仁(アーティスト、陶芸)、シゲ・フジシロ(アーティスト、ガラス)

アルベルト・カヴァッリ(ミケランジェロ財団エグゼクティブ・ディレクター)

モデレーター

ターニャ・ハロッド(工芸史研究者・評論家、Journal of Modern Craft 共同編集者)

秋元雄史(GO FOR KOGEI アーティスティックディレクター)

会期 | 2025 年 7 月 24 日 (木)

会場 | Hochhauser Auditorium、V&A South Kensington

主催 | ヴィクトリア&アルバート博物館、認定 NPO 法人趣都金澤

助成 | 文化芸術活動基盤強化基金



台湾での展開

台南市美術館「皮膚と内臓—自己、世界、時間」展



本展は、皮膚と内臓の感覚を起点に、自己、世界、そして時間を組織する試みです。身体的な直接性や感覚的経験を肯定し、そこから生まれる神秘的かつ象徴的な表現を通じて、現代における自己の在り方や世界との向き合い方を探求します。現代アートにおける重要な理論や思想を参照しつつ、草間彌生をはじめとする過去の革新的アーティストの精神を継承する日本の次世代の10名の女性アーティストたちを紹介します。

彼女らは、男性性や権威との闘争を超えたフラットな社会の中で、自身を模索し、新たな存在の意味を問う作品を生み出しています。引用された草間彌生の自伝『無限の網』では、「古い道徳に縛らず、自分の好きなことをして生きるべきだ」と語られ、自由の中で生き続ける力強い表現が描かれています。この精神は、現代のアーティストたちにおいても重要なテーマとして響き、彼女らの創作に深い影響を与えています。

また、本展では『葬送のフリーレン』に描かれる魔王を倒した後の主人公の旅という物語をメタファーとし、大きな物語の終わりの後で自己を見つめ、他者や「後の世界」との関係性を再構築する試みを映し出します。

アーティスト

小林万里子、佐合道子、佐々木類、中田真裕、三嶋りつ恵、宮田彩加、牟田陽日、山下茜里、留守玲、綿結

キュレーター

秋元雄史 GO FOR KOGEI アーティスティックディレクター

会期 | 2025 年 10 月 3 日 (金) - 2026 年 1 月 18 日 (日)

会場 | 台南市美術館 2 号館 1 階ギャラリーA、B、C、D

監修 | 中華民国文化部、台南市政府

主催 | 台南市美術館

共催 | 認定 NPO 法人趣都金澤

協賛 | 公益財団法人日本台湾交流協会

助成 | 文化芸術活動基盤強化基金



【本リリースに関するプレス問い合わせ先】

取材・掲載の際には、下記までご連絡ください。

西谷・多胡 (リレーリレーLLP) 電話: 090-2062-6963 e-mail: press_81@relayrelay.net

添付資料

台南市美術館での展覧会 出展アーティスト プロフィール

小林万里子

1987 年大阪府生まれ。2012 年に多摩美術大学大学院博士前期課程デザイン専攻（テキスタイルデザイン研究領域）を修了。主な展覧会に、個展「オーバーストーリー」（KOTARO NUKAGA、2021 年）をはじめ、グループ展「貳畫廊 2023」（San gallery・台湾、2023 年）や「糸と布-日常と生を綴る-あざみ野コンテンポラリーvol.13」（横浜市民ギャラリーあざみ野、2022 年）、「Reborn-Art Festival 2021-2022」（石巻市、2021 年）などがある。主な受賞歴は、「VOCA 展 2025 現代美術の展望 新しい平面の作家たち」奨励賞（2025 年）や「Tokyo Midtown Award 2014」優秀賞（2014 年）。スターバックスコーヒー銀座葛屋書店ほかコミッションワークを多数実施している。

佐合道子

1984 年三重県生まれ。2019 年に金沢美術工芸大学大学院博士後期課程修了、博士（芸術）取得。主な展覧会に、個展「工芸論の動態 vol2-2 佐合道子展『祈り』」やグループ展「現代工芸への視点 装飾の力」（東京国立近代美術館工芸館、2009 年）、「和巧絶佳展 令和の超工芸」（パナソニック汐留美術館ほか巡回、2020-2022 年）、「第 17 回パラミタ陶芸大賞展」（パラミタミュージアム、2023 年）がある。受賞歴に「国際陶磁器展美濃・国際陶磁器コンペティション」入選（2014 年／2024 年）など多数。金沢美術工芸大学や茨城県陶芸美術館に作品が収蔵されている。

佐々木類

1984 年高知県生まれ。武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科クラフトデザインコースガラス専攻を卒業後、2010 年にロードアイランドスクールオブデザイン大学院ガラス科修士課程を修了。近年の主な個展に、「不在の記憶」（WALL alternative、2025 年）、「Subtle Intimacy : Here and There」（ポートランド日本庭園、2023 年）、グループ展に「清州国際工芸ビエンナーレ 2023」（清州、2023 年）や「Voice of Glass Collaborative」（ラトビア国立美術館、2021 年）。受賞歴は、「第 33 回 Rakow Commission」（2019 年）、「富山ガラス大賞展 2021」大賞（2021 年）など多数。主な収蔵先にコーニングガラス美術館をはじめエベルトフトガラス美術館、金沢 21 世紀美術館などがある。

中田真裕

1982 年北海道生まれ。香川県漆芸研究所にて漆芸を学び、2021 年に金沢卯辰山工芸工房を修了。近年の主な展覧会に、個展「The Skies Above - 中田真裕の蒔繪」（ア・ライトハウス・カナタ、2024 年）をはじめ、グループ展「カラーズ - 色の秘密にせまる 印象派から現代アートへ」（ポーラ美術館、2024 年）や「心象工芸展」（国立工芸館、2024 年）などがある。受賞歴に「LOEWE FOUNDATION Craft Prize」ファイナリスト（2019 年）や「第 4 回金沢・世界工芸トリエンナーレ」大樋陶治斎審査員特別賞（2019 年）など。国立工芸館、金沢 21 世紀美術館などに作品が収蔵されている。

三嶋りつ恵

1981 年京都府生まれ。1989 年にヴェネツィアに移住し、1996 年よりガラス制作を開始。近年の主な個展に、「祈りのかたち」（シュウゴアーツ、2023 年）、「RITSUE MISHIMA - GLASS WORKS」（国立アカデミア美術館・イタリア、2022 年）、「IN GRIMANI」（国立パラッツォ・グリマーニ美術館・イタリア、2013 年）、「あるべきようわ」（資生堂ギャラリー、2011 年）。主なグループ展に「そこに光が降りてくる 青木野枝／三嶋りつ恵」（東京都庭園美術館、2024 年）、「アジア回廊 現代美術展」（二条城、2017 年）、「ヨコハマトリエンナーレ 2014」（横浜美術館、2014 年）、「第 53 回ヴェネツィアビエンナーレ」（ヴェネツィア館、2009 年）など。作品は、パリ装飾美術館をはじめヤン・ファン・デル・トフト美術館などに収蔵されている。

宮田彩加

1985 年京都府生まれ。2012 年に京都造形芸術大学大学院 芸術表現専攻修士課程（染織領域）を修了。主な展覧会に、個展「裏腹のいとはよすが」（岐阜現代美術館、2022 年）をはじめ、グループ展「KYOTO STEAM 2022 国際アートコンペティション」（京都市京セラ美術館、2022 年）、「札幌国際芸術祭 2024」（北海道立近代美術館、2024 年）などがある。主な受賞歴は、「第 35 回 タカシマヤ美術賞」（2025 年）や「令和 5 年度 京都市芸術新人賞」（2024 年）。和歌山県立近代美術館に作品が収蔵されている。

牟田陽日

1981 年東京生まれ。2008 年にロンドン大学ゴールドスミスカレッジ（ファインアート科）を卒業し、2012 年に石川県立九谷焼技術研修所を卒業。主な展覧会に、個展「眼の器」（銀座 葛屋書店 Ginza Atrium、2021 年）をはじめ、「清州クラフトビエンナーレ」（清州・韓国、2023 年）や「ジャンルレス工芸展」（国立工芸館、2022 年）、「GO FOR KOGEI 2021」（大瀧・岡太神社、2021 年）などがある。主な受賞歴は、「第 11 回パラミタ陶芸大賞展」大賞（2016 年）や「伊丹国際クラフト展『酒器・酒盃台』」優秀賞（2012 年）。国立工芸館、パラミタミュージアム、能美市九谷焼美術館に作品が収蔵されている。主著に『牟田陽日作品集「美の器」』（芸術新潮社、2020 年）がある。

山下茜里

1997 年大阪府生まれ。2021 年に京都精華大学芸術研究科博士前期課程を修了。主な展覧会に、個展「Beyond the Skin」（小山登美夫ギャラリー天王洲、2024 年）をはじめ個展「Human being Human」（Thomas VanDyke Gallery、2024 年）、「瀬戸内国際芸術祭 2022」（高見島、2022 年）など。受賞歴として、「第 2 回丹波アートコンペティション」大賞（2021 年）のほか「第 28 回岡本太郎現代芸術賞」入選（2025 年）がある。染・清流館（京都）と南城美術館（沖縄）に作品が収蔵されている。

留守玲

1976 年宮城県生まれ。2002 年に多摩美術大学大学院美術研究科デザイン専攻（クラフトデザイン）修了。2023 年より多摩美術大学工芸学科金属プログラム准教授。主な展覧会に、個展「Cut' SPCC 変容速度の自律」（壺中居、2024 年）をはじめ、グループ展「Contemporary Metalwork 変貌する金属」（岡山県立美術館、2022 年）や「開館 30 周年記念展 II 工芸のカー 21 世紀の展望」（東京国立近代美術館工芸館、2007 年）などがある。受賞歴に「第 2 回菊池寛実賞」（2016 年）や「第 11 回 日本現代芸術奨励賞」（2003）など多数。ウィクトリア&アルバート博物館、国立工芸館、山口県立萩美術館・浦上記念館などに作品が収蔵されている。

綿 結

2000 年静岡県生まれ。2025 年に金沢美術工芸大学美術工芸研究科修士課程（工芸専攻）を修了。主な展覧会に、「GO FOR KOGEI 2024」（岩瀬エリア、2024 年）のほか「KUMA experiment 2023-24 vol.6『日々の触覚』」（クマ財団ギャラリー、2024 年）、「もののあわれは秋こそまされ」（金沢市立中村記念美術館 茶室 耕雲庵、2023 年）などがある。主な受賞歴に、「Forbes JAPAN 30 UNDER 30 2024」MUFG 特別賞受賞（2024 年）や「第 67 回金沢美術工芸大学美術工芸学部卒業・修了制作展」学長賞（2024 年）。金沢美術工芸大学に作品が収蔵されている。